〔研究ノート〕

ミャンマー国際ワークキャンプ・プログラムで／からつくられる学びの共同体 －対話を通じた他者理解と生き方の変容から考える－

渡邉　暁子

〔Research Notes〕

Creating and Continuing the Learning Community in/from Myanmar International Workcamp Programs: With Focus on Understanding Others through Dialogues and their Transformations in Ways of Life

Akiko　WATANABE

Abstract

This study focuses on the international workcamp programs that has been held in the same place for six years as a regular university program. It aims to clarify 1) what kind of changes have been brought about in the practice and approach of understanding others by Japanese student volunteers, and 2) what kind of influence has been exerted on the host society and related actors. By focusing on understanding others through dialogues and their transformations in ways of life, the author tries to elucidate the learning community created in / from international workcamps, its continuity, and challenges.

１．はじめに

国際ワークキャンプとは、「異なる言語や文化、宗教、家庭環境などを背景に持つ多国籍・多様なボランティアたちと共同生活をしながら、地域の活動体と協働し、課題解決のために取り組む活動」[山口 2017: 76]である。2015 年以来、筆者は本学国際学部国際ボランティア委員会主催の正課プログラムとしてミャンマー国際ワークキャンプを同僚の林薫教授と企画・引率し、日本の NPO およびミャンマーの NGO と連携して、同国東部にある村落を訪れてきた。この村落では、仏教僧院が寄宿舎を運営しており、1000 人を超える子どもたちが周辺地域から集まり、村の学校で教育を受け共同生活を営んでいる。こうしたなか、国際ワークキャンプ・プログラムは、ローカル・リーダーとして僧院の高僧から聞き取ったニーズを基に、ボランティア活動することを目的としてきた。毎年 3 月に約 2 週間の期間で実施される本企画には、各期 6 名から 22 名までの主に国際学部 1 年生が参加してきた。

本稿は、上述の通り 2015 年から 2020 年まで毎年同じ場所で実施されてきた国際ワークキャンプ・プログラムを対象にする。そのうえで、複数年継続されてきたプログラムは、1) 日本人学生ボランティアの他者理解の実践やアプローチにどのような変容をもたらしたのか、2) 受け入れ社会や関わる諸主体にどのような影響を与えたのかを検討していく。それによって、国際ワークキャンプで／からつくられる学びの共同体とその継続性、および課題を明らかにしていく。

従来、日本においては海外の貧困問題や南北問題を是正するために活動してきた草の根組織が国際協力 NGO を結成し、それらが中心となって、国内の若者を対象に海外ボランティアを企画してきた。加えて、アクティブラーニングの実践、2010 年以降はグローバル人材の形成といった教育政策の変化に乗じ、近年は高等教育機関でも解体体験学習が制度化され、従前の正規留学のほか、国際ワークキャンプやスタディツアー、フィールドスタディ、ボランティア、サービスラーニングといったように、キャンパス外での正課活動が多く見られるようになっている。

そうした国際ワークキャンプや学生ボランティアが展開されていくと、様々な観点から議論が引き起こされてきた。本稿では、それらを、①素人性の限界と可能性、②非日常性と互恵性、③学びのプロセスの 3 つに分類した。まず、活動の受け入れ先である地域社会に精通しておらず国際協力の専門性が低いことから、学生ボランティアは、地域に貢献するどころか、かえって地域への負担を増大させるアマチュアリズムの問題としても捉えられてきた[伊勢崎 1997]。他方で、白川は、同様の青年海外協力隊の「コミュニティ開発」を「アマチュアリズム」と批判しつつも、「狭い専門性の枠組みに縛られないことで、活動の対象となる人々やその生活、社会のあり方などを、人々と同じような生活者の目線でより広く捉え得る余地がある」[白川 2019: 720]と、素人性の可能性にも言及している。この可能性を高めるためには、国際ワークキャンプのような現地での生活と交流が大きな役割を果たす。中国のハンセン病患者の暮らす地域における学生ワークキャンプを研究してきた西尾は、国際ワークキャンプにおいてキャンパーが地域住民との関わりを深め、共同性や親密性の構築しようとする行為が、「外部／他人事の社会問題／公的問題」を「内部／日常的な人間関係／親密圏に取り込む」[西尾 2015: 30]行為であるとし、国際ワークキャンプが当事者性を形成し、共同性と親密性が構築される場所であると論じている。

国際ワークキャンプが持つ共同性や親密性については、一過的である非日常性が関係していると日下も同調する。フィリピンにおけるワークキャンプに長年携わってきた日下は、国際ワークキャンプは、圧倒的な非日常感のなかでキャンパーと村人の気分を高揚させる「祝祭的な地場」を生んでいるとしている[日下 2015]。また、専門的な国際 NGO と比してワークキャンプが手弁当である一方、国際 NGO のように「現地の人びとを囲い込んだり、道徳を強要したり、庇護―従属化する能力も資源ももたない」[日下 2015: 133]コミュニタス的性格が、地域住民とボランティアの間にある既存の序列的なカテゴリーを侵食させていると論じている。このような、先進国と途上国との間にある支援＝被支援関係が学生ボランティアによって均衡化されうることを、杉田は社会間の互恵〈お互いさま〉と捉えなおしている。杉田は、日本人学生が国際ボランティアとして参加し、発展途上国の地域に対する恩を時を超えて返礼するすることによって、「グローバル支援はより均衡の取れた互恵性となり、その互恵性のあるグローバル支援が、より持続的な地域間の結合や助け合いにつながっていく」[杉田 2017: 170]と主張する。

確かに国際ワークキャンプは一過的ではあるものの、一定の時間を共有するため、その期間内の、またはその後の変化やプロセスこそが重要であるという論調もある。国際ワークキャンプを実施する NPO 職員として様々なワークキャンプを率いてきた山口は、参加者の変化について、社会的な実践共同体への参加の度合いを増すことこそが学習であるというレイブとヴェンガー[1993]の「状況に埋め込められた学習」の正統的周辺参加の理論を用いる。同理論を援用し、実践共同体への正統なアクセスを持つキャンパーは、キャンプへの参加の過程で試行錯誤を経ながら役割を担い、コミュニケーションを通して周辺参加から十全参加に変容しうることを指摘している[山口 2017]。ただし、他者理解の実践や考え方の変容は、参加をした期間だけでなく、活動が終了したあとも続

きうる。これに関しては、学生ボランティアについて研究を進めた猪瀬が「生き方の人類学」を提唱している。猪瀬は、田辺[1993]のいうところの「実践コミュニティ」に参加する諸主体が、その中で起こる権力関係も含めた交渉を通じて、不断に己の生き方を構成していく「アイデンティティ化」の過程を明らかにすることの重要性を説いている[猪瀬 2010]。

本稿では、こうして個人に生じた他者理解や自己理解の変化を描きつつ、それがこれまでの国際ワークキャンプ参加者を含む諸主体の関係性の変化にも焦点を当てる。本国際ワークキャンプを受け入れる現地社会は毎年同じ村落であるが、環境は変容し生徒の顔触れも変わることから現地は変化し続ける主体である。一つの教育機関に属する学生ボランティアもまた、再参加者が若干いながらも毎年の参加者は入れ替わるため、こちらも変化し続ける主体である。提携する NGO も同様である。こうして諸主体が変化していくなかで、三者の間にはどういった相互作用があるのだろうか。大学として国際ワークキャンプを通じて地域社会に関わり続けていくことの意義は何だろうか。現地とのつながりはどのように変化しているのだろうか。また、毎年の参加によって引き継がれていくものやそれを阻むものは何だろうか。

さて、学びのプロセスや変化が国際ワークキャンプに携わった諸主体で生じていくことから、本稿ではそれを学びの共同体と捉える。教育学者の佐藤は、学びを対象世界や自己や他者との対話とそれによる関係性の再構築であると提示した[佐藤 1995]。これを受けて、「学びの共同体」概念は、大学教育の文脈で大きく二つの意味をもつものとして使用されてきた。一つは、従来の講義における一方向知識伝達型教育のあり方とは異なる教育原理として、つまり学生と教員がともに学び合う存在として実践されていくことであり、もう一つは、学部間・大学間・大学と地域が連携し、それぞれのリソースが生かされながら学びが進められるという教育のあり方である[杉原 2010]。国際ワークキャンプを中心とする 6 年の時間の積み重ねのなかで、学生と教員が学びあう存在として実践されてきたことや、大学と提携 NGO や現地社会との関係構築が図られてきた。これにより、国際ワークキャンプのグループのメンバーはもちろん、接触の濃淡に関わらず、諸主体が学びを経験してきたといえよう。

これまでの国際ワークキャンプを通してつくられてきた学びの共同体は図 1 のとおりである。そこでは、ワークキャンプ運営者として、ミャンマーの NGO 事務局長と日本の NPO、キャンプの内容について依頼や助言をするローカル・リーダー(高僧)、ワークキャンプを率いるミャンマー人グループリーダー(NGO 職員)や、グループ副リーダー(NGO インターン)がいる。ミャンマー人グループリーダーや副リーダーは、ヤンゴンなどキャンプ地の外の都市部出身の若者が多い。その点では、ワークキャンプに参加する日本人学生ボランティアと同様、地域にとっては外部者である。大学メンバーには教員と学生がおり、学生にはリーダーとなった再参加者もいる。一方、現地においては、ミャンマー人大学生(短期[1])のボランティアや、寄宿舎で暮らす生徒、僧院が預かる子ども、僧院の周囲に暮らす村人などがいる。山口[2017]は、ワークキャンプ地を訪れる外部者、すなわち色付けされた部分のみを学習の実践共同体としたが、実際に学び変容するのはワークキャンプ地の人びとにも見られてきたため、本稿では大きな四角形の内部全体を学びの共同体とする。

1　ミャンマーでは、通常の長期の通学型課程と短期の遠隔教育(通信教育)型課程があり、1 年間のなかで、通学型常課程の学期が 10 カ月間であるのに対し、遠隔教育型課程の学期は 2 か月ほどである。遠隔教育型の学生は、学期外にはボランティアや生計活動をしたりと、学外で過ごす。どちらの課程を履修するかは、授業料や入学試験の得点によるところが大きい。

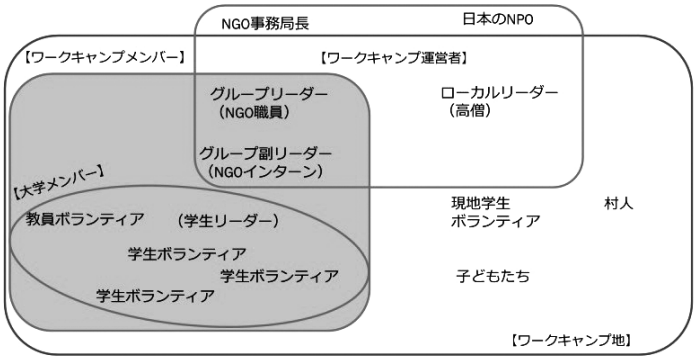

図１　ワークキャンプにおける学びの共同体

注：山口［2017］を基に筆者作成

先取りして現地で／から生じた変化を説明すると、変化には短期的、長期的なものがあった。学生ボランティアについては、対話を通した関係性の捉えなおし、自身のボランティア観への戸惑いと再構築、ボランティアを通した他者理解、自己変容といったものである。教員ボランティアについては、仏教僧院を基盤とする現地の社会的序列への組み込み、大学内での学生との教授＝被教授関係の捨象である。ミャンマー人のグループリーダーについては、経験値の蓄積、すなわち運営力や信頼性の向上などが見られ、当初は誘われて気軽に NGO のインターンに参加したが、海外ボランティアとの交流や学び合いを通してワークキャンプに没入し、6 年間の間に NGO の正規職員になった者も数名いた。寄宿舎周辺や村内の衛生環境に変化もみられた。ただし後述するように、現地の僧院は多くの海外支援を受け入れていることから、本学の国際ワークキャンプのみが現地社会に変化をもたらしたわけではないことは容易に推測できよう。

本研究の調査方法は次のとおりである。調査期間は 2014 年 11 月から 2020 年 4 月までであり、これには、毎年の国際ワークキャンプ事前学習（面接、勉強会）および事後学習（ミーティング）における観察、学生ボランティアによる報告会への参加、帰国後に学生たちから提出されたレポート、ワークキャンプ地での参与観察、学生ボランティアへの聞き取り、提携 NGO 幹部やスタッフへの聞き取り、そして関連する学術文献調査を含む。

２．国際ワークキャンプの受入地域と活動

１）地域の歴史

ミャンマー共和国連邦の東部に位置するシャン（Shan）州は、インレー湖という観光資源もあり、外国人による入域が政府によって許可された州の一つである。本国際ワークキャンプの受入地域は、同州のタウンジー（Taunggi）県ニャウンシュエ（Nyaung Shwe）郡区にある、インレー湖畔のパヤータウン・ヤイ・サテ（Phayartaung Yay Sate）村である。同地域に 1983 年に移り住んだのは、地元でポウンポウンジー（最高位にある仏教僧侶の尊称）と呼ばれる男性である[2]。ポウンポウンジーによると、ニャウンシュエ郡区は、1970 年代までパ・オー（Pa Oh）民族解放戦線の戦闘地域であり、

2　名は U Thu Wunna であるが、現地社会ではポウンポウンジーとして知られていることから本稿では尊称を使用する。また、以下、ポウンポウンジーからの聞き取りによる（2020 年 3 月 16 日）。

また 1991 年までシャン州軍とミャンマー軍政と内戦状態にあったため、人びとは散住し教育を受けるのは困難であった。当時は校舎がなく、僧院の一棟を使って小学 1 年から 4 年までの基礎教育が僧院によっておこなわれていた。60 名ほどの男子生徒が学んでいたが、女子生徒はまだ受け入れていなかった。

ミャンマーでは、校舎を建設し教員の給料も地域が支払い、一定期間「学校」として継続させることによって中央政府から正式に「学校」としての認可が下りる。その後は教師の給料も政府が賄う。地域社会の開発を進めるポウンポウンジーは、教育こそが子どもたちの将来にとって必要なことと考え、1986 年から 91 年、93 年から 2003 年、2004 年から 2010 年にかけて、小学校、中学校、高校を開設し、政府の認可を得た。女子生徒も 1994 年以降受け入れている。校舎の建設費や教師の給料は、第二階位の僧侶であるポウンポウンリーとともに周辺地域を回って寄付金を募る代わりに、子どもたちへ教育を提供することを約束した。国内外と結びつきを深め、日本の国際交流基金も校舎建築費や教師の給料、文具を支援した記録が現地には残っていた。2020 年 3 月時点で、学期中は 1195 人（男子 698 人、女子 497 人）の生徒、ボランティア教師や僧侶 131 人を合わせると、1326 人が生活をしている。

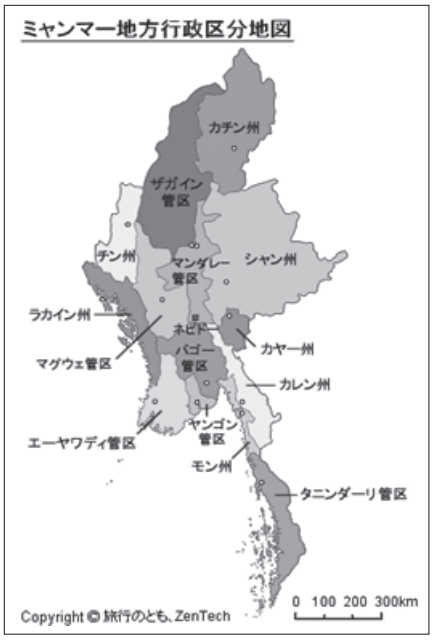

図２　シャン州

注：ZenTech より

多くの人びとを養っていくために、僧院は自前の農地を持ち、寄宿舎で暮らす子の親や近隣地域からの現金や物資（食料・日用品・燃料）を寄付として受け取っているほか、5km ほど離れた水源からパイプを引いて精製した飲料水を売り、現金を得ている[3]。精製水工房を寄付したのは僧院の運営に共感した外国人である。調理場や診療所を寄贈した個人・組織もある。他にも国内外からボランティアを受け入れ、日本語や英語教育、裁縫や機織り、コンピューターなどの職業訓練、初期看護コースなど、高校卒業後の進路に役立てそうな技術も提供している。

この地に本学国際ワークキャンプのパートナーであるミャンマーの NGO と関係が築かれたのが 2010 年代に入ってからである。僧院が人生や心の平安など仏教に基づく教えを NGO 職員やボランティアに教授する代わりに、NGO がミャンマーと世界とのつながりや近年の国内外の動向を伝えるなど学び合うなかで、協働して地域の開発を目指している。こうした理念のもとで同 NGO がパヤータウンで展開する国際ワークキャンプは年に 4 ～ 5 回ほどあり、そのうちの 2 回は日本からの大学生を主体とするワークキャンプである（もう 1 回は別の大学のプログラムである）。パヤータウンでの国際ワークキャンプの目的は、ワークを通して地域社会を支援することである[4]。とりわけ、本学学生がワークキャンプに参加する時期は、ミャンマーでは大学試験の直前もしくは最中に当たるため、生徒たちが受験勉強の時間をなるべく確保できるよう、かれらの日課の仕事を少しでも引き受けることが目指された。ただし、総じて上記 NGO が目標としたのは、パヤータウンでの国際

3　なお飲料水は寄宿舎で暮らす子どもたちは無料で飲むことができる。
4　同 NGO が配布したワークキャンプの案内文より。

ワークキャンプを通じて、キャンプの参加者および地域の若者が能力開発を強化すること、青少年が社会的認識を促進させ平和的社会開発のために諸分野での活躍をエンパワーさせること、異文化交流を学ぶこと、友情を育みスキルと理解を共有することを目指すもので、一方が他方に有無を言わさず奉仕すること、価値を押し付けることではなかった。このため、肉体労働をともなうワークにおいては、高僧は生徒や少年僧侶に声をかけ、かれらが積極的に手伝うことが奨励され、知識や考え方の共有を図るワークショップにおいても、日課を離れて参加することが良しとされた。

2）学生ボランティアの活動と6年間での変容

こうして、ミャンマーのNGOとパヤータウンの僧院が構築した信頼関係の上に、日本のNPOを通じて、本学の国際ワークキャンプが実施されてきた。大学からの参加者が一定数に満たなかったときは、NPOの追加募集によって多様な属性のキャンパーが参加した年もあったが、次第に学内の参加者数が増え(図3)、第3期以降、日本からは本学学生だけでプログラムが実施されている。

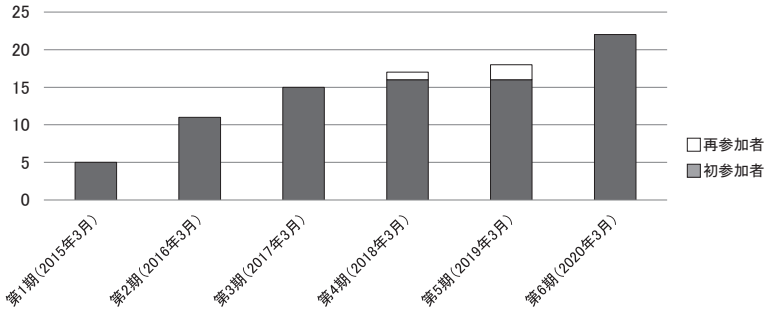

図3　ミャンマー国際ワークキャンプに参加する学生ボランティア数の変化

注：筆者作成

国際ワークキャンプの内容も、幼稚園の補助、農作業、調理補助、ゴミ拾いといった肉体労働に加え、日本語の授業や、グローバル課題や社会的文化的課題について取り組むワークショップなど、日本人学生だからこそ求められた活動もあった。これらの活動内容は、ローカル・リーダーとワークキャンプのグループリーダーが参加者の属性や健康状態を基に決めていた。

各プログラムと最初と最後の日程で、ワークキャンプのメンバーはローカル・リーダーと対話をする機会が設けられ、パヤータウンの生活の感想とともに、地域社会の発展のために望ましいものは何か、どのような具体的な取り組みが必要かを話し合ってきた。本学側が提案した事項が期間中に実施されることもあれば、次年度に再訪したときに実施されていることもあった。このため、年を追うごとに、前年のスケジュールになかったものが組み込まれることも増えた(表1)。たとえば2017年のワークキャンプでは、地域のゴミ拾いをしたとき、使用済みの注射針が裸足でサッカーをするエリアのすぐ近くに落ちていたり、草むらに放置されていたのを学生ボランティアが見つけた。その日の夜のミーティングでこの状況を何とかしたいという思いを開示した学生は、キャンプメンバーだけでなく、グループリーダーや教員を動員した。結果、注射針に関して診療所や地元市場での調査をおこない、その結果を基に教員が看護学生に対して注射針に関する講義を実施し、子どもたちにはポイ捨て防止やゴミの分別を促すポスターづくり、ゴミの影響に関する簡単な授業の実施、その内容の動画撮影と、後日現地公立学校の授業における放映の依頼をしている。

表１　各期における活動内容

	活動内容
第１期 (2015年)	日本語の授業、幼稚園の補助、農作業(ウコン収穫)、清掃、調理補助、ワークショップ(地域の宝地図づくり、平和の絵描き)、ゴミ拾い
第２期 (2016年)	日本語の授業、幼稚園の補助、清掃、フェンスづくり補助、薪割り、調理補助、ワークショップ、ゴミ拾い
第３期 (2017年)	日本語の授業、清掃、薪割り、農作業(雑草取り)、浄水場の手伝い、調理補助、ワークショップ(浴衣の着付け、茶道)、ゴミ拾い
第４期 (2018年)	日本語の授業、農作業、浄水場の手伝い、薪割り、清掃、調理補助、ワークショップ(せっけんづくり)、ゴミ拾い
第５期 (2019年)	日本語の授業、幼稚園の補助、調理補助、薪割り、土木作業(パゴダ改修の手伝い)、清掃、ワークショップ(地域の宝地図づくり、コンポストづくり、運動会、縁日)、ゴミ拾い
第６期 (2020年)	日本語の授業、幼稚園の補助、調理補助、薪割り、農作業(搾油用ひまわりの抜き取り)、ワークショップ(運動会)、清掃

注：筆者作成

学生ボランティアの現地社会への関わりに変化が生まれたが、それは６年間続けられてきた国際ワークキャンプの体制と地域社会にも変容をもたらした。まず、体制の変化については、過去のワークキャンプ参加者の中から再参加者も出始め、引率教員ではなく、かれらが学生リーダーとなり、ミャンマー人グループリーダーと連携を取る体制となった。この学生リーダーは、中長期ボランティアとしてワークキャンプが始まる数週間前の２月から現地に滞在し、日本語教室の運営や現地における自らの活動にも従事した。それにより、地域社会との関係性や理解を深めていった。

村の状況については、村内の路上ゴミがほぼなくなり、英語話者や日本語話者が増えた。路上ゴミについては、生徒が組織化されて定期的な回収がおこなわれていることがわかった。また、以前に現地で案内を頼んだ女子生徒は、ある程度の意思疎通はできたものの、私たちと英語でうまく話すことができなかった、もっと私たちと理解し合いたかったことが後悔として残り、それが英語のコミュニケーション能力を向上させる原動力となったと述べていた。実際、翌年訪れたときには、堂々と英語で話をし、交流を深めることができた。日本語話者の増加については、当初はインレー湖に来訪する日本人観光客のためのガイドや、ヤンゴンで展開する日系企業の通訳として働くことが想定されていたが、2020年には、日本にミャンマー人ケアワーカーを派遣するヤンゴンの人材派遣会社と提携し、実際に４月から日本に行くための研修がなされているなど実利が結び付いたことが要因となった[5]。

それでは、ワークキャンプ受入地において日本人学生ボランティアはどのような経験をし、それをどのように分析し、自らの学びとしていったのだろうか。そこからいかなる関わりの変化や課題が析出できるだろうか。第６期生の学生のレポートを抜粋した以下の①～⑮から考察していく[6]。

5　ただし、2020年初めから生じたコロナウイルスの世界的な感染拡大により、研修を受けていた生徒たちの来日は実現されていない(2020年９月時点)。

6　学生レポートの末尾のイニシャルは匿名であり、識別のために用いている。

3．日本人学生ボランティアの他者理解やアプローチの変容

1）自己との対話、対象世界や他者との対話

ワークキャンプに参加する学生は国際学を学んできた。このため、ミャンマーの地方村落に行き、「物質的に乏しい状況にいるかれら」を自分たちが「助ける」ことをワークキャンプの参加動機とした学生が多かった。

①「正直なところ、もっと『ありがとう』と直接言われるようなことをすることがボランティアだと勘違いをしていた。私は村に暮らしていて感謝という見返りのようなものを求めてしまっていた。ボランティアをする上で見返りを求めることは違った。ボランティアは偽善でやる人もいると良く言われているが、偽善で活動すると、そういった考え方になると思った。」(AA)

また、出国前にパヤータウンに関する事前勉強会もあり、ミャンマー社会について学んだものの、日本社会で培われた価値観や物事を判断する尺度を相対化するのは現地に来てからであった。

②ワークキャンプ中、村の人々と同じ衣食住の生活を共にする中で、私は無意識に彼らの文化と日本の文化を比較し、優劣をつけていた。例えば、私は毎日服を着替えているが、村にはそうでない人もいたため、私の方が彼らより清潔であると感じたこともあった。日本での生活はそれが当たり前であったため、それが正しいものだと自分の中で認識していたのだ。だが、比較し優劣をつけたことは間違いであり、私が初めに定義付けた異文化理解とはかけ離れたものであった。(BB)

第1期から第6期までの学生ボランティアの半数は、初めての海外渡航だった。大人数での雑魚寝、ロンジー(ミャンマーの伝統衣装で筒状の衣類)を使った屋外での水浴び、衣服の手洗いなど、すべてが初めての体験だった。水を大量に使って排水溝をあふれさせる「失敗」をしたり、冬の終わる日本から温暖なミャンマーに移動して体調を崩して休む学生も散見された。このため、最初の数日を過ごすと、自分たちが無力な存在なのではないか、むしろトラブルを生み、仕事を増やし、足をひっぱっているのではないかと戸惑うようになる。

③「一緒に参加したメンバーの中には、実際にワークをして自分の無力さを痛感していた者がいた。本当に村の現状を変えたいのならば、日本から寄付を送るとか、ポンポンジーにあれしろこれしろと言えば済む話だろう、と考えた。しかしもしそうなのであれば我々がこのようにボランティアをする為にわざわざ日本から来たのは何の意味があるのか。」(CC)

支援の効率性を考えればCCの③の意見も妥当で、効率的な意思決定や財の配分が正しいだろう。しかし、日下[2015]も述べるように、国際ワークキャンプの活動原理とは、それまで接点のなかった異なる国の人びとが「邂逅する接触空間を生み出し」、「新たな『私たち』という共同性を創出し、そこから社会変革を模索すること」[2015: 134]である。そのためには、他者である地域の人びとを、より身近な存在として理解していくことが求められる。

④「『小さな親切大きなお世話』という言葉が世の中には存在する。自分が良かれと思ってやって

いることが実は彼らはありがた迷惑だと感じているかもしれない。だからこそ、本当に相手のためになるボランティアをするためには支援相手の地域、経済状況、宗教、文化を理解することが重要になる。支援する相手や具体的な内容を考え、相手のことを理解できたボランティアは間違いなく良いものになるのではないだろうか。」(DD)

パヤータウンに着いて数日後、学生ボランティアは、この地域が必ずしも物資不足で困っているわけでもないと気付き、自らの来訪や活動の意味を問い直し、自身や他者との関係性を真摯に考えていく。同じ状況を経験しても、その状況の意味は必ずしも両者の間で共有されていない。その状況の意味を共有するために、学生たちはコミュニケーションをとり、差異を埋めようと試みる。

2）コミュニケーションの手法、名を呼び呼ばれる親密な関係の構築

パヤータウンでは、英語話者がさほどいない。学生ボランティアはミャンマーの公用語であるビルマ語を習熟しておらず、さらにパヤータウンで暮らす子どもたちのなかには民族語(パ・オー語、ダヌー語、インダー語など)[7]しか解さない者もいる。そうしたなかで、学生ボランティアは、地域の人びとを一方的な解釈するのではなく、自身がどのように振舞い、相手との距離を縮められるかといった行動をしていく。これには、上記のような言語による意思疎通が困難な場において、かれらが見出していった打開策である。

⑤「村の子どもたちとは言語の壁が大きく、最初はコミュニケーションをとるのがとても大変だった。しかし、言葉ではなく行動で会話するようになった。行動と表情をよく観察することで、違う価値観や思っていることを発見することができたからだ。」(AA)

行動と表情の観察は、相手の目線に立つことを意味する。何を考えているのか、何を欲しているのかを読み取ろうとし、自身を相手にすり合わせていく。観察を通して得られた気づきによって、学生ボランティアは自らの思い込みを払拭させていく。

⑥「私は自分の名前を覚えやすいように変えた。すると、子どもたちは親近感が湧いてたくさん名前を呼んでくれた。子どもたちも自分の名前を呼びやすいように省略してくれて、お互いたくさん名前を呼び合った。私はこれらの工夫も異文化を理解する上で大切なことであると考える。相手の文化を理解し、自分が相手の国の文化に歩み寄ることで相手も自分のことを知ろうとしてくれる。」(EE)

名を呼び呼ばれる間柄は、識別できない一般化された他者を、親しい個別の他者へと転化させる。「私たち」という親密な関係が築かれることで、自身がその地域に受け入れられていると感じるようになる。実際に学生ボランティアたちは、「今日は何人の子どもたちの名前を覚えたい」と目標を立て、ワークキャンプの中盤になると、「今夜は○○たちと星を見に行く」とともに過ごすことが増え、「◇◇と K-pop で盛り上がった」とボランティア同士の話題に上り、「今日の△△は元気がなかった」と子どもたちの問題を自分事化するするようになっていった。

7　ミャンマーには公式には 135 の民族がいる。

3）視座の転換

現地の若者や子どもたちとの関係の構築や試行錯誤を日々を重ねるなかで、学生ボランティアが当初に自らに課した高い期待値や、それが叶わないことへの自らへの失望は、異なる目標を設定しなおすことで昇華していった。

⑦「しかし、よく考えてみれば、海外ボランティアが初めてで、たった2週間しかいない私たちができることは限られているし、相手の信頼も薄いと思う。まずは、信頼関係を築くことから始め、相手の生活を理解し、共に経験することにより、必要な事、出来る事が見えてくるのだと理解した。」(FF)

これは諦観ではなく、等身大でできることをしていくという視座の転換であり、他者との関係性を築くうえの基本に立ち返ることである。特別なことをするというよりも、⑧のように日常の延長線上にある対話というコミュニケーションを通して他者と意味を共有し、他者を理解することの重要性を再認識したといえよう。

⑧「現地の子たちは、むしろ私たちボランティアとコミュニケーションを取りたくて一緒に作業をしてくれたそうだ。現地に行って生活して起こった問題は私たちにとって初めての出来事であるから、一方的な先入観で目の前で起こったことをマイナスなこととして処理しやすいのかもしれない。そんな中で感じたことは、現地の子とどれだけコミュニケーションをとれるかがとても大切になると感じた。一方的な先入観は先入観に過ぎない。ただそれでしかない。違う国同士だからこそよりコミュニケーションをとることでそこから見える文化・その現場の状態があるのだと痛感した。」(GG)

4．ワークキャンプで／からつくられる学びの共同体

1）学びを実践する対象世界や他者とは誰か？

そうして原点に立ち返ったとき、仲間がいて対話ができることは大きい。学生ボランティアは、自らの思いを言語化することで、相手に伝え、相手と共感し、相手から新たな気づきを得ていく。その相手は、同じ学生ボランティアや、グループリーダー、教員ボランティアなどである。

⑨「ワークを一緒にしている時に自分達よりも薪を切ったり、キッチンで食材を切ったりしている子どもたちの姿を見て、自分たちは役に立てているか、子供たちに助けてもらい、もてなしてもらってばかりで足を引っ張っているのではないか疑問に思った。そのことは、ミーティングでも同じように考えているメンバーもいて不安なことや疑問を出し合った。そして、話し合った後には、暗い雰囲気にはなったものの口に出してみることで、新たなことに気がついた。一人で頭の中で考えて不安なことや良かったことなどを話し合うと気がつけなかったことや、他のメンバーの見ている世界を知れて自分も明日からは意識してみようという気持ちになった。」(EE)

このように国際ワークキャンプの期間中、対話を通して多方向の学びの共同体が徐々に築かれていく。ワークキャンプという場が水平的な関係性をつくり、誰かから一方的に学ぶというよりも、と

もに学び合う存在として相互に認めていく。かれらは、地域の学生ボランティアや子どもたち、村人からも学ぶ(図 4)。ただし、学びはプロセスであるため、すぐさま自身の知識や言動に反映させられるわけではなく、時間を要する。

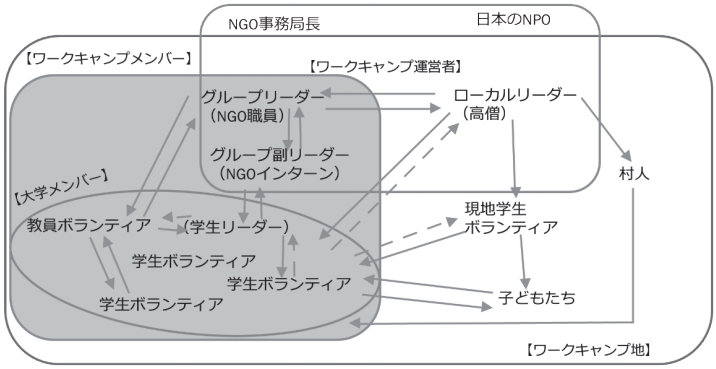

図４　ワークキャンプにおける多方向の学びの共同体

注：筆者作成

2）新しいワークをつくりだすことと「参加のはしご」

ワークキャンプにおける対話と多方向の学びは、学生ボランティアが協働による参加という新たな段階を上ることにつながっていく。

⑩「キッチンの洗い場の食べ残しや女子トイレの溢れんばかりの溜まったごみが気になってしょうがなかった。誰も何とも思わないのか疑問でしょうがなかった。そこでメンバーを募ってキッチンの洗い場の食べ残しをみんなで綺麗にした。長期休暇ということもあって、掃除する当番の人がいないようであったが、新たな仕事を見つけて動くことも必要なことだと思う。子どもたちも私たちの姿を見て、一緒に手伝ってくれた。協力することで一人では解決できないことも解決できる。自分で気がついて行動し、共有することで力になってくれる人の大切さを実感した。また、女子トイレのごみを見て処理の仕方が気になったので行方を村の子どもたちに聞いた。しかし、詳細については、詳しく知っている子はおらず、悩まされた。そこでメンバーや教授と共有をしたら、ポンポンレーとのごみ問題について詳しくお話を聞ける機会をいただけた。」(EE)

⑩のエピソードは、学生ボランティアが自らの提案によって新しい活動をつくりだすことを示すものである。これは国際ワークキャンプ参加の初期には実践が難しく、状況に対する判断ができるようになるまで時間と経験を要する。この参加の度合いは、教育学者であるロジャー・ハートの「参加のはしご」理論と親和性が強い(表 2)。ハートは子どもの参加にはいくつかの段階があり、第 1 段から第 3 段は非参加の段階で避けなければならず、第 4 段以降が参加の段階で、上にいくほど望ましいとする[8]。この「参加のはしご」は共同体づくりにおける大人と子どもの関係を想定しているが、これをワークキャンプ運営者と学生ボランティアの関係に置き換えると、表 3 のとおりとなる。

8　ただし、第 7 段と第 8 段のどちらが上にあるべきかは、議論の分かれるところである。

表２　ハートの「参加のはしご」

第８段：大人を巻き込む参加	子どもが計画、実行するが、その過程で大人を巻き込む。主導権はあくまでも子どもにある。
第７段：子ども主導の参加	子どもが計画して最後までやりきる。
第６段：共同決定参加	子どもと大人が一緒に考えて、双方同意のもとに意思決定する。
第５段：意見参加	子どもは意見を言うことができる。しかし、最終的な決定は大人がおこなう。
第４段：役割参加	大人が子どもに役割を割り振る。子どもには情報が与えられ、その意味は分かっている。
第３段：形式的参加	子どもだけの参加は形だけで、実質的には参加していない。
第２段：お飾り参加	子どもが「飾り」として利用されている。
第１段：操り参加	大人のために子どもを利用、または欺いている。

注：ロジャー・ハート(2000：42)より

表３　学生ボランティアの現地社会への関わりを考える「参加のはしご」

第８段：ワークキャンプ運営者を巻き込む参加	学生ボランティアが計画、実行するが、その過程でワークキャンプ運営者を巻き込む。主導権はあくまで学生ボランティアにある。
第７段：学生ボランティア主導の参加	学生ボランティアが計画して最後までやりきる。
第６段：共同決定参加	学生ボランティアとワークキャンプ運営者が一緒に考えて、双方同意のもとに意思決定する。
第５段：意見参加	学生ボランティアは意見を言うことができる。しかし、最終的な決定はワークキャンプ運営者がおこなう。
第４段：役割参加	ワークキャンプ運営者が学生ボランティアに役割を割り振る。学生ボランティアには情報が与えられ、その意味は分かっている。
第３段：形式的参加	学生ボランティアだけの参加は形だけで、実質的には参加していない。
第２段：お飾り参加	学生ボランティアが「飾り」として利用されている。
第１段：操り参加	ワークキャンプ運営者のために学生ボランティアを利用、または欺いている。

注：筆者作成

第４段以降はワークキャンプへの消極的参加ではなく、積極的参加を表している。注射針の扱いめぐる諸活動や洗い場の清掃は、一部の学生ボランティアの参加が第７段まで上がったことを示しているだろう。では、どのような条件があって参加の段階を上がることができたのか。次節で詳述するが、主には次の通りである。まず、提携 NGO とローカル・リーダーとの長期的で良好な関係や、継続してワークキャンプに参加してきた大学とのつながりといった、息の長い関係が形成されてきたことが大きい。その上に、かれらが参加しているワークキャンプは、学生ボランティアから成るものだという仕組みへの気づきがある。それは、この仕組みを動かせるのは自分たちという自らの実践可能性に対する気づきである。これには、キャンプ活動中における他の学生ボランティアなどとの対話やそこからの学びに大きく影響している。

3）素人性

学びの共同体において多様な人びとと対話をし、参加のはしごを上ることができたとしても、学生ボランティアには素人性がつきまとう。だが、そのことが逆にかれらが自分自身と対話をし、自他に対する理解を通した関わりを選択していくことにつながっているといえる。

⑪「学生ボランティアは特別な技術や専門知識は持っていない素人である。私ははじめ、短期間で何が残せるのか結果ばかりを考え、自分の理想と現実でできることのギャップに苦しんだ。しかし村での時間の中で、支援する側される側の意識で物事を捉えてはいけないと考え始め、少しずつ自分の立ち位置が見えてきた。だから何か残そうとするのではなく日々目の前のことに一生懸命に取り組み楽しむことにした。素人だからこそ一緒に問題を解決しようとし、現地の生活の流れに沿ったボランティアが行えると思うのである。」(HH)

⑫「また、ポンポンジーは『他国の学生が来ることで、生徒の勉強意欲が高まり、新たな情報や知識経験を得ることができる』と話していた。ボランティアがゴミをポイ捨てしなかったり清掃する姿を見て年々村は清潔になっていたり、村の生活向上や発展、人材育成に学生ボランティアは交流の中で貢献しているといえる。専門的なボランティアを呼んで大きなプロジェクトをするより、学生ボランティアを呼んで少しずつ生活を改善させていく方がリスクが低く受け入れやすいことも利点だろう。」(JJ)

前述の伊勢崎は「『開発援助』は、『外力』として途上国社会に関わることである。特に、草の根のそれは、共同体と密接に関わり、時には土着のリーダーシップの構造にまで関与しなければならない。一歩間違えれば、それを内部から破壊することにもなりかねないのだ。こんな重大で深刻な業務が、何で『アマチュア』などに任せられるのか」[伊勢崎 1997: 53]と、素人性が抱えるリスクについて批判する。確かに、専門家ではない学生ボランティアができることは支援の観点からは効率性が低い。しかし、インフラの整備や制度作りはともかく、急激な変化を避け、地域社会の人びとの内面からの変化を期待するのであれば、逆に素人が等身大の関わりをし、寄り添っていくことのほうが望ましいこともあろう。

4）ゆるやかに続けていくこと

その等身大の関わり方は、一過性で終わらない。毎年のように学生ボランティアは現地を訪れ、同じような悩みを抱え、自分なりの現地社会との付き合い方をし、現地の課題に対して取り組んできている。無論、帰国後にワークキャンプ参加者が報告書を作成し、翌年度の参加者に向けて自分たちが現地でできたことやできなかったことを伝えるが、「これをしなければならない」という方向性は示さない。とはいえ、それが継続性を生み、関わった人びとをはじめとして現地社会に影響を及ぼしていることは確かである。

⑬「問題を一つ解決して、一歩進んでもまた新たな壁にぶつかる。村のごみ問題や衛生問題は完全に無くなってはいないが、先輩方を含むボランティアの方たちが、毎年継続してワークをしてきたことにより、1 歩ずつ進んでいくヒントになったのである。私たちに出来ることは、ワークキャンパーとして現地に赴き、実態を知り、行動することである。それらを続けていき、伝えて

いくことである。微力かもしれないが、継続は力なりという言葉のようにこの村に行くことで私たちが問題を見つけ、自分たちができる範囲で解決に向けて、考え、行動していくことは、意味あるものだと言える。その気づいたことや行動を続けていき、広めていくことで、時間はかかっても確実にいい方向に行くはずだ。」(EE)

国際ワークキャンプは、わずか2週間という期間での接触空間の形成である。諸主体による学びの「成果」は必ずしもその場では見えず、時間をかけて顕出していき、次第に変化を形どっていく。

5）断絶性という課題

国際ワークキャンプを同じ村落で毎年続けていくと、そうした微細な変化に気づくことができる。その一方で課題もあり、学生ボランティアが帰国した時点でかれらの現地に関する認識は止まってしまう。このため、年度ごとの学生ボランティア間のコミュニケーションがあったとしても、地域社会の変化を加味した他者理解の引継ぎがおこなわれないという問題がある。

⑭「手作り石けん(ワークショップ)は、日本での事前作成ができず、ぶっつけ本番になってしまった。現地のモノでといっても日本基準で考えていたため、実際に作成する際、多くの考え方・準備に関して不足している部分が多かった。実際に同い歳くらいの子たちに教えるという貴重な経験をさせてもらって、教える立場の責任というものをすごく感じた。生徒たちが真剣に聞いてくれる姿・視線をすごく感じていたからこそ、しっかりとワークショップを成功させるべきだったし、それがボランティア側の準備不足で出来ないのはすごく恥ずかしく、悔しかった。」(KK)

⑮「(コンポストが生徒の帰省によって終了したことについて)今回の中長期ボランティアでは、日本語教育やワークキャンプ、コンポストづくりなどを通して、ボランティアする側とされる側の共通目標や持続可能性について考えされられた。」(LL)

現地では学期間の子どもの移動もある。ある時点で子どもたちや若者を集めて知識や方法を共有したとしても、学校の卒業やボランティア期間の終了によってその地を離れてしまうため、それらが継続されないことも多い。⑮の意見のように、地域での取り組みの継続には組織作りも大事だが、他者との価値の尊重や意味の共有といったような対話を通した地道な関係づくりが必要である。

6）教員ボランティアの役割

最後に、教員ボランティアの立ち位置についてである。現地では、教員がその専門性を以て実践的な知識を提供したり、正課プログラムであるがゆえに学生の抱える悩みに対応しなければならないこともあるだろう。しかし、教員ボランティアが国際ワークキャンプのグループに干渉しすぎると、ボランティアリーダーと学生ボランティア間の対話が不足する。教員ボランティアは、ワークキャンプ地と日本との間の引率者ではあるが、現場では、いちボランティアとしてかれらの随走者たるべきと考える。第6期のワークキャンプ中に、ある学生から「先生が引率者なので決めてください」と言われたことがあった。これは学生ボランティアの意識を阻み、かれらが参加のはしごを登る機会を教員ボランティアが阻害してしまうことにつながりうる。その背景に、組織の参加者数が多くなると、水平的な関係よりも垂直的関係が強くなる傾向がある。それによる一方向性をい

かに抑制していくか、学びの多方向性を導く仕組みづくりや意識づくりが重要となる。それゆえ、「引率者」として大学内における関係を現地に持ち込まず、教員が現地社会に没入し、地域の社会的序列に組み込まれることも、学生の学びを広げる一助となるだろう。

5．おわりに

本稿は、ミャンマー国際ワークキャンプ・プログラムを通じて、日本人学生ボランティアの他者理解の実践やアプローチがどのように変容したのか、受け入れ社会や関わる諸主体にどのような影響を与えたのかを検討することで、国際ワークキャンプで／からつくられる学びの共同体とその継続性、および課題を明らかにすることを目的とした。

国際協力の実務家である中田は、著書のなかで教育思想家パウロ・フレイレの理念を用い、「人は経験を分析することを通して学ぶことができる」と述べる[中田 2015: 56]。経験しただけでは学びを得ることにはならず、しっかりとその経験に向き合うことが求められる。また、分析する作業を助け合いながらおこなうことで、より大きな学びが得られるとする[同上]。本プログラムの一部の学生ボランティアも、国際学を学んできた背景から、ミャンマーの地方村落で物質的に乏しい人びとを「助ける」ことを参加動機とした。しかしながら、いざ現地の子どもや若者たちと交流し始めると、現地は「意外にも貧困ではなく、悲壮感が漂っているわけでもない」ということを知り、「意外にも人びとは笑顔でいて幸せ」に見えると気づいていった。ここで意識化されるのは「意外」と思う自分自身である。発展途上国の人びとは一様に貧しく、自分たちが施す側であるという前提でいたこと、そうした「人道的教育」の考え方が日本社会に生きるなかで染みついていたことに気づくことである。学生たちはそれを観察や自他との対話を通して意識化し、自分たちの現地訪問や活動の意味を問い直し、他者理解を内面化させていった。そして、ワークキャンプ終了時には、「ボランティアは、他者を助けることではなく、コミュニケーションである」「ともに生活することで、かれらではなく私たち自身が変わった」と視座の転換や自己の変容に言及するに至った。

とはいえ、その 2 週間の経験では他者理解の内面化に至らないこともままある。本プログラムの特別プログラムで再参加し、より深い形で現地社会に関わるなど生き方の変容をたどる学生もいる。2019 年に参加した 1 名は、その参加理由を「何度も何度も足を運び信頼関係を築き、自分なりに村の日常を構成していくことが必要だった」と述べる。別の 1 名は、振り返りのなかで「活動中に、前回以上に色々な想いや考えを抱き、葛藤した」と語る。ワークキャンプ初参加では見えなかった景色が開かれ、自他に対する学びの深化につながったことがわかる。

一方で、こうした学生ボランティアの関わり方に触れるミャンマー側の僧院やグループリーダー、子どもたちや若者らも、対話や交流を通して刺激を受け、勉強意識の高まり、自身や地域に対する気づき、将来の生き方に対する見直しをすることもある。時間の経過とともに、諸主体が変化していくためにすべての生徒や村人に及ぶものではないが、ワークキャンプ運営者、大学メンバー、現地社会の三者の間で少しずつ多方向的かつ互酬的学びが展開されてきているといえよう。

以上をふまえ、ワークキャンプで／からつくられる学びの共同体から次のことが示唆できる。一つは、学びの濃淡はありつつも、試行錯誤の経験と自他との対話を通した他者理解のなかで、自分と世界を同時に省察し、生き方の変容が図られていくことである。そこには、同時代に生きる他者との等身大の関わりと変革を恐れない心が必要となろう。もう一つは、学びの継続性のための仕組みの重要性である。現場では理解できずに違和として残っていたことが、当該学生に内面化される

までは時間を要する。また、一年に一度のプログラムであり、参加者が入れ替わることにより知識や他者理解の方法の断絶性は常に付きまとう。このため、正課のなかで、諸主体をつなぐ仕掛けをつくっていく（例えばICTの活用や現地とともにおこなう事後プログラムの導入）ことや、それを引き継いでいくことが求められ、それを通して、学生同士、学生と教員、大学と現地NGO、現地社会、日本のNPOとの間に人間的な関係が不断なく紡ぎなおされていくことが期待される。

参考文献

伊勢﨑賢治．1997．『NGOとは何か――現場からの声』藤原書店．

猪瀬浩平．2010．「ストリートで授業する――2008-2009年度明治学院共通科目『ボランティア実習101』Go Westの記録」『明治学院大学教養教育センター紀要：カルチュール』4（1）：151-165．

日下渉．2015．「『祝祭』の共同性――フィリピン・キャンプにおける素人性の潜在力」山口健一・日下渉・西尾雄志編『承認欲望の社会変革――ワークキャンプにみる若者の連帯技法』京都大学出版会、pp.105-135．

佐藤学．1995．『学び――その死と再生』太郎次郎社．

白川千尋．2019．「グローバル支援の時代におけるボランティア――青年海外協力隊の『コミュニティ開発』ボランティアをめぐって」『国立民族学博物館研究報告』43（4）：703-727．

杉原真晃．2003．「大学教育における『学習共同体』の教育学的考察のために」『京都大学高等教育研究』12：163-170．

杉山映理．2017．「参加するのは私たち――学生たちが国際ボランティアに参加する動機と意義」信田敏宏・白川千尋・宇田川妙子編著『グローバル支援の人類学――変貌するNGO・市民活動の現場から』p.143-172．

中田豊一．2015．「『なぜ？』と聞かない対人援助コミュニケーション手法」和田信明・中田豊一編『途上国の人々との話し方――国際協力メタファシリテーションの手法』、pp.27-60．

西尾雄志．2015．「公と私の円環運動――親密圏が秘める公共性」山口健一・日下渉・西尾雄志編『承認欲望の社会変革――ワークキャンプにみる若者の連帯技法』京都大学出版会、pp.19-43．

山口紗矢佳．2017．「NGO（NICE）による国際ワークキャンプ――状況学習の観点から」子島進・藤原孝章編著．『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版、pp.76-93．

ロジャー・ハート／IPA日本支部訳．2000．『子どもの参画――コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実践』萌文社．